

『社長の椅子が泣いている』

(加藤仁著、講談社)

不二家、パロマ工業等々同族会社の不祥事が世間を騒がせている。この本は“定年著作”のエース、加藤仁が日本楽器を舞台に繰広げられたお家騒動というより、殿ご乱心！の事実を丁寧に怒りをこめて綴ったものである。

その殿様、川上源一と息子に忍び難きを忍んで仕えた専務・河島 博、つまり本田技研の社長・河島喜好の弟の話である。この彼が日本楽器から石をもて追われた後、ダイエーに請われ、これまた中内親子に仕え同じ運命が。もちろんこの悲劇のテクノクラート型ビジネスマンの経営手腕、発想力、人心掌握術等々も開陳され、追詰められたこの2社を再建する実務も学習できる。

それにしても、創業者や中興の祖が息子に権力を遮二無二委譲しようとする異常さ、凄まじさ、おぞましさはパターンがあるようである。同族経営の弊害研究はあるがそのなかでも特に上場会社だけでも数多のケースがある、子への“会社”委譲を過去の人望や徳を捨ててまで姦計で押通す乱心殿様の防止策研究が待たれる。“本田宗一郎と藤沢武雄の密約”という道義に頼らなければならないのか、社外重役や委員会制度で何処まで対処できるのか興味深い。

そのような思いでいると2冊の本が目についた。読売の正力親子と氏家斎一郎の葛藤の出てくる『Gファイル・長嶋茂雄と黒衣の参謀』（武田頼政著・文藝春秋社）と『昭和が明るかった頃（吉永小百合という物語：筆者注）』（関川夏央著・文春文庫）である。日活社長堀久作親子と大番頭・最後の活動屋と呼ばれた江守清樹郎の話は苛烈であり、息子堀雅彦の最後は哀れである。若きビジネス研究家が本テーマと取組んで熱っぽく語ってくれることを期待したい。

東洋学園大学 教授 平井 宏

※記事・写真等は[社]日本マーケティング協会の許諾を得て転載しております。
著作権は[社]日本マーケティング協会に帰属。
記事、画像等の無断転載は一切お断りします。